

# 「育ち」という言葉

竹内 順子

## 研究用語としての和語の増加について

近頃の保育や教育に関する論議のなかに、「学び」・「教え」・「気づき」・「働きかけ」・「支え」などの和語の用語が、学術的タームとして登場することが多くなってきた印象があります。なかでも「育ち」という語（「巢立ち」が語源といわれる）は、実践的な子ども研究において、研究者の

みならず現場の先生たちにもよく使われるようになってきたようです。「学び」に対しては「学習」、「気づき」には「感覚・発見」、「教え」は「教授」、「働きかけ」や「支え」には「指導」や「援助・支持」などの漢語表現が対応するようですが、それぞれかならずしもびったりこないのは、和語と漢語のあいだにある質的、歴史的、文化的差異に因るものと考えられます。保育や教育

の営みは、本来、衣・食・住と並ぶ「育」とい  
う、生活上のありふれた日常的・基本的活動です  
から、「育」を語る言葉として、漢語にくらべて  
よりやわらかで「土着的」ともいえる、生活や文  
化における豊かな和語的表現が見直されるよう  
になってきたのも、当然のなりゆきかもしれません  
。このほかに、「出会い」というような、対応  
する漢語的タームの見当たらない、新しい哲学的  
視点を表す語もあります。「遊び」などは和語的  
なタームのはしり（遊戯にかわる）といえるかも  
しれません。

### 「育ち」という語の普及

さて、「育ち」という言葉ですが、これに対応  
する漢語としては「生育・成長」、「発達」などが  
あります。「生育」はどちらかというと生物学的  
なイメージが強く、「成長」は読んで字のごと

く、形態的な増大を直観させる言葉です。一方の  
「発達」は、生物のみならず、例えば社会、文化  
の様式や技術などの、低次元から高次元にいたる  
展開過程について表現する際にも使われる概念で  
す。しかし、人間の発達について語る場合は、従  
来の心理学という学問が形成してきた発達観・人  
間観が色濃く反映しているといえるでしょう。

子どもの保育にかかわっている人にとって、  
「発達」という言葉はどのようなイメージのある  
言葉なのでしょう。ある保育園の先生が次のよ  
うに発言されるのを聞いたことがあります。「発  
達というのは確かに大問題で、発達段階のことを  
考えて指導案をたてたりはするのですが、むしろ  
『育ち』ということばの方をよく使うようです。  
『育ち』が見えにくくなったときに、『発達』が  
問題になるようです」と。ここから感じられるの  
はまず、「発達」という言葉が現場ではあまり

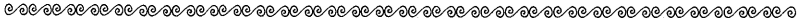


しっくりこない部分があるらしいということ。 「育ち」という語を使う研究者も、ほとんどが実践的な保育にかかわる場をもち、そこでの生きた現実をどのように研究という異次元の作業に結び付けようか問いつづけている方が多いのです。

このように保育の実践と省察のあいだに立たされている人によって、保育中に子どもから直観する「発達のなにか」と、当の「発達」という従来の用語とのギャップを埋めるものとして採用されたのが「育ち」だと考えられます。「発達」という言葉では表現しにくいと感じている実践的な実感を、「育ち」という用語で暗示しようとしているような意図さえ感じることができます。その意図がどの程度意識的なものかはわか

りません。しかしそれが使いやすさに流されないように、そして保育者たちの間柄でないと通じないような閉鎖的・セクト的な用語とならないように、自覚的に使われる必要があると思われま

す。ここで、最近の「育ち」という用語の急成長について数字で示して置きましょう（表参照）。まず国内で出版されている和文図書（主な学術機関・国会図書館所蔵）のタイトルのなかに、「育ち」という言葉がどのくらい見られるかについて、データベースから検索してみます。表内の数字には、「氏より育ち」に見られるような、遺伝や家柄などとの対照語として語られる「育ち」は省かれています。また「東京育ち」などの、場所やそれに類するものを付したものの、人間以外の生物に関するもの、そして名詞形でないものも除外されています。すると結果的に、算定された図書はすべて保育関係の文献で、その数は一九八〇年



代、特に半ば以降徐々に増加していることがわかります。次に、日本保育学界の研究発表論文のタイトルにあらわれる、名詞形の「育ち」という語の数を見てみます。すると、やはり八〇年代半ば、特に八九年以降の増加傾向がみとめられるのです。

### 「育ち」と「発達」

近年の比較発達学や乳幼児心理学では、乳幼児を「刺激の受容体」として見る見方から、周囲の環境にみずから働きかけていく主体的な存在として認めようとする傾向があります。保育学の分野でも、子ども観はこの方向にすすんでいます。つ

〔表〕

出版図書		日本保育学会 研究発表
1	1894	—
0	1947	0
1	1948	0
1	1949	0
1	1981	0
1	1986	1
1	1987	0
0	1988	0
3	1989	2
7	1990	2
6	1991	2
3	1992	3
1	1993	2
3	1994	3
5	1995	5
—	1996	7

まり子どもは「育てる」よりも、まずみずから「育つ」存在であって、大人はその育ちを援助し支えていく者としてかかわるのだ、というあらたな発達観に変化しつつあるといえるでしょう。この変化が八九年、九十年の幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂を支え、同時に「育ち」という用語の増加を動機づけていると思われます（もつとも、「要領」や「指針」には、名詞形の「育ち」という語は使われていません）。

最後に、「育ち」という用語の使用される文脈的な意味と、従来の「発達」という言葉が持っているイメージの意味との違いについて考えてみましょう。

#### 関係性・相互性

「発達」という概念は、近代科学的な心理学のなかで成長してきたために、研究主体と対象との関

係を切り離す方法で探究されてきた歴史を負っています。ですから「発達」について語るには、子どもという対象を標準化、数量化などの手法で、大人の主観からできるだけ遠ざけなければならぬような一般的なイメージがあります。これに対して「育ち」は、保育実践になんらかのかかわりをもつ人たちに使われていることが多く、子どもとのかかわりを通して、主観を大切に扱おうとする傾向が読み取れます。また、「の育ち」のの部分は、子どものほかに、母親や学生、保育者などの主体が比較的自由に組み込まれます。「母親の育ち」にくらべて「母親の発達」と言うとの違和感があり、意味も不鮮明なのではないでしょうか。保育を通して子どもどうし、また大人の保育者も共に育ち合うという、相互的な発達観が「育ち」（あるいは「育ちあい」という語で表現しや

すくなっているようです。

### 時間性・空間性

出発の「発」と到達の「達」を合成した「発達」という言葉は、起点から終点への直線的で、等間隔目盛りのモノサシ的な時間軸をイメージさせます。「発達目標」という終着点(ゴール)や、「発達段階」という目盛りがその上に書き込まれているのです。一方「育ち」を見つめる者は、子どもの生活している現在に巻き込まれて、刻々と子どもの現在に立ち会う位置にあります。ここで「現在」は均等割りの時間軸を前提にした、過去と未来には含まれたというだけの消極的な瞬間とはちがいます。「育ち」に立ち会っている保育者の主観が、「子どもの変化を「変わったな、育ったな」ととらえたときに、「育ち≡変化」としての時間が押し出されていくと見ることができるの

ではないでしょうか。

また、「育ち」を語る人にとって、子どもと共通の場を体験しているということが重要です。研究者の主観を排除しようとする従来の「発達」的な視点では、子どもの近くにいっても、ビデオ記録や観察法などによってあえて仕切りをする手法をとって「客観性」を保持しようとしています。しかし、「空間の共通体験性」を逆手にとって、保育研究の新たな可能性のよりどころと考えるのが、「育ち」論者には特徴的です。



## 契機（人間観）

「発達」あるいは「育ち」という変化が何を契機にして発想されるのか、にも違いがあります。従来の古典的な発達観によれば、子どもの観察可能な行動を運動、知能、認知、言語、社会性などの各特質に分類し、それぞれについてどのレベルを達成しているかで発達段階を判断するという、能力主義的な傾向が強かったといえます。これによると、たとえば障害のある子どもたちの「発達」は非常にいびつで、遅々とした消極的なものとして映ることになりがちです。しかし、彼らと共に保育にかかわっている者にとって、その子どもとしての全体的な「育ち」を見出すことが保育の支えになっているのが現実です。何ができるか、ではなく、存在感・能動性・相互性・自我の四視点に「人間が育つ」ことを見ようとする津守真氏の洞察は、「育ち」の用語の背後にある人間観を示

唆していると私には思われます。

「発達」の反対語としては、「退行・停滞」などがありますが、「育ち」では植物の「枯れ・朽ち」あたりでしょうか。Developmentは本来、もつれた糸のほどける様子を意味し、直線的なイメージのある「発達」という日本語とは趣を異にする言葉のようです。しかしこのDevelopment「以前」の「糸がもつれている状態」は、子ども「育ち」が見えないで、保育者が悩み迷い困惑し暗中模索している様子に通ずるような気がします。この「もつれ」が、ある瞬間ほどけて、急に視界が開けるようにして「育ち」が見えてくる。そう考えると、人間の中に発達性という本質をそもそも見出した頃の、発達観の起源は「育ち」的なものだったのかなあとという空想が湧いてきます。

（十文字学園女子短期大学）